

(単組番号)	(単組名)	(所属)	(氏名・フリガナ)
19	安城	安祥中学校	名前 ヨコヤマ 横山 マサル 勝
分科会番号	3	分科会名	社会科教育（中学校）

資料をもとに多面的・多角的に物事を捉え、考えることのできる生徒の育成

1 主題設定の理由

現行の学習指導要領では、「社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を育成することを目指す。」とされている。社会科、とりわけ地理的分野においては、社会的事象を多面的・多角的に捉える力とともに、調査や諸資料から地理に関する情報を効果的に調べまとめる技能が求められている。こうした資質・能力を備えた生徒を育てたいと考え、本主題を設定した。

本学級の生徒は、課題に対して真剣に取り組む姿勢をもち、教師の発問に素直に応答して、自分たちで疑問を見だし、解決しようとする様子が見られる。グループ学習でも、課題解決に向けて活発に意見を交流し、知恵を出し合う姿がある。その一方で、授業中の発言には消極的であり、教科書の記述を根拠に自分なりの考えをもつことに苦手意識を感じる生徒が多い。「自分の言葉で言うと、どういうことですか。」と問い返すと答えられない生徒が多く、答えは見つかっていても、それを整理し言語化する力が不足していると感じられた。また、4月以降、資料を活用して考える場面を意図的に設けてきたことで、資料を読み取る力は少しずつ育ってきた。しかし、そこから読み取れる内容は「山が多い。」「飛行機がたくさん飛んでいる。」といった直接的な事実の指摘にとどまり、多面的・多角的な考察には至っていなかった。中国・四国地方の学習で「本州四国連絡橋の完成による人々の生活の変化」を扱った際にも、本州と四国を行き来する人が増えたという事実には気づけたものの、その裏にある「四国から本州への人口流出」や「その結果としての四国の商業等の衰退」にまで踏み込んで考察できた生徒は少なかった。つまり、資料に書かれている情報を読み取る力は身につけてきているが、捉えが一面的であり、その情報を根拠として自分なりの考察を組み立てる力、複数の資料を関連づけて考察する力が十分に育っていないことが課題として浮かび上がった。

この課題を解決するためには、資料から自分の考えを構築する場面を段階的に、繰り返し設定することで、資料を読み取る際の視点を与え、さまざまな立場から資料を捉える経験を積み重ねていく必要があると考えた。授業の中で教師が効果的な資料を複数用意し、生徒が必要な情報を自ら見つけ出し、自分なりの根拠をもって考えをまとめられるようにしたいと考え、本研究テーマを設定するに至った。

2 テーマに迫る基本的な考え方

(1) 目ざす生徒像

課題に対して、資料を根拠に、さまざまな視点や立場から考察を行い、自分なりの考えをもつことができる生徒

(2) 研究の仮説

目ざす生徒像に迫るためには、多くの資料を提示し、課題への向き合い方や根拠をもつ力を養っていくことが必要であると考えた。そこで本研究では、小学校の修学旅行での生活体験とかかわりの深い

「近畿地方」の学習の中で、京都市の景観条例を取り上げた授業を実践し、目ざす生徒像に近づくことをねらいとした。

仮説①:多面的・多角的な捉えができる資料を多数提示し、資料の見方を指導することで、事象を複数の視点・立場から考えることができるようになるだろう。

仮説②:根拠となる資料を複数用意したり、適切な助言を与えたりすることで、根拠を明確にして自分の考えに自信をもつことができるだろう。

(3) 具体的な手だて

〈仮説①について〉

(ア) 社会的事象を複数の視点・立場から考える力を高めるため、地形的側面、経済的側面、人口的側面などの資料や、それぞれのメリット・デメリットを考える時間を設ける。

(イ) 新たな視点に気づけるよう、他者の考えと自分の考えを比較・共有する時間を設ける。

(ウ) 視点の違いを意識させるため、複数の資料をタブレットで配布したり、テレビ画面に提示したりする。

複数の資料を見比べる活動や他者との意見交流を通して、自分と異なる立場・視点があることに気づく機会を多く設けた。教師がそこに注目させるよう意識づけることで、生徒が自分の意見を考える際にも多面的・多角的に検証できるようになると考えた。

〈仮説②について〉

(ア) 根拠をもとに自分の考えをもてるよう、考えをノートに記入する時間を多く設け、その際に根拠となる箇所にアンダーラインを引かせる。

(イ) 自分の意見に自信をもてるよう、根拠とともに発言できた生徒を取り上げ、効果的な振り返りを行っている生徒を全体に紹介する。

(ウ) 予想される生徒の意見の根拠となる資料を複数提示し、正解が一つではないことを意識させ、自分の意見に自信をもたせる。

これらの活動を通して自分で考える力を養うとともに、朱書きや声掛け、振り返りの全体紹介を通じて、根拠をもった意見のもち方を指導し、生徒一人一人に自信をつけさせていく。

(4) 抽出生徒 A について

生徒 A は社会科の授業に意欲的に取り組み、他の生徒の挙手が少ない場面でも進んで発言し、教師の問いかけによく反応する。瀬戸内工業地域が発展した理由を答えるなど、明確な答えが存在する問いには意欲的に答えられる一方、教科書の内容を自分の言葉で説明することには苦手意識をもっている。促成栽培の利点を問われた際にも戸惑いながら、教科書の語句を抜き出す形でしか発言できなかった。このことから、A は自分の意見を持ち、自分の力で考えること自体はできるが、その考えを言語化し、根拠を明示して意見をもつ力に課題があると考えられる。そこで本時では、これまで培ってきた資料を読み取る力とそれを言語化する力を生かしながら、さまざまな視点からの資料を提示することで、京都市の人口減少に対する自分の考えを発言できる姿を期待した。具体的には、ノートに根拠が書けていない場合はその根拠となる箇所を一緒に確認し、書けている場合はその箇所にアンダーラインを引かせた。また、「反対意見についてはどう考えるか。」と問うことで、他の意見や視点にも目を向けられるよう支援した。

(5) 単元構想(全6時間)

時	主な学習内容	教師の支援
第1時	・近畿地方の地理的特徴を知る。 ・人口分布の資料から、人口が多い地域と少ない地域の特徴を確認する。	○近畿地方の地形図と人口分布の資料を用いて、人が住める地域が少ないことを確認させる。
第2時	・大阪都市圏が発展した背景と特色を捉える。 ・都市部への人口集中により過密の問題が起きていることを理解する。 ・老朽化するニュータウンの課題を理解する。	○都市部の中心部と郊外の地価の資料を提示し、近畿地方の人口の偏りに気づかせる。 ○ニュータウンの現在の様子の資料を提示し、老朽化などの問題に気づかせる。
第3時	・人口過密に対する取り組みと今後の課題について知る。 ・過去に行われた人口増加への対策を知る。	○地価の資料とニュータウンの位置関係を確認し、過去の対策の意図に気づかせる。 ○現在のニュータウンの写真・資料を提示し、時代の変遷に伴う課題に気づかせる。
第4時	・京都市の抱える人口減少と観光業の人手不足の問題について自分の意見を考える。 ・京都市の特徴を地理的側面・産業的側面・人口的側面などさまざまな視点から分析する。	○京都市の人口減少率が日本一であることと観光業でにぎわっていることから、人口減少が続くことで起こる問題点を考えさせる。 ○人口減少の資料、寺社が集中している資料、主な産業やこれまでの歴史を振り返らせる。
第5時	・前時に考えた課題をもとに、魅力ある京都を続けていくためにどうすればよいか考える。 ・人口を増やすための政策と歴史的建造物の扱い、景観条例との向き合い方について考える。	○京都市の人口減少の原因となりうる資料を複数提示し、自分の意見の根拠とさせる。 ○景観条例についての資料を提示し、人口増加のためにマンションを建てる等の考えをもつ生徒に揺さぶりをかける。
第6時	・農村部での課題と現状を理解する。 ・都市と農村の関係について学ぶ。	○農村部のマップを用いて病院などの少なさに気づかせ、過疎化の問題点について考えさせる。

3 実践と考察

(1) 実践の全体像

本単元は、「近畿地方」の学習を通して「魅力のある京都を続けていくためにはどうしたらよいか」という課題について考えることを目標に実践を行った。とりわけ「京都市の人口減少が著しいが、その理由と対策について、資料とともに考察していくこと」をねらいとし、単元全体を通じてさまざまな視点や立場から事象を見ていく中で、特に人口に着目して授業を展開した。このようにして、人口減少の理由とその対策についての理解を深めていくことをねらいとし、全6時間の単元を構想し、実践を行った。

(2) 近畿地方をながめて

第1時では、近畿地方の特徴について抽象的なイメージをつかめるよう授業を行った。近畿地方は平野が少ないという地理的特徴があるため、人口は平野部に密集している。この特徴を捉えられるよう、近畿地方の人口分布の資料を提示し、人口が多い場所と少ない場所の違いを問うた。すると「栄えているかどうか。」「建物が多いかどうか。」といった意見が出たが、地形に触れた意見は出なかった。そこで、経済的な側面については後で扱うこととした上で資料を提示し、「どのような場所に人口が多いか、理由も合わせて考えよう。」と問うことで、根拠をもたせるよう促した。さらに、複数の資料を関連づけて考えられるよう、近畿地方の地形図もあわせて提示し、比較しながら考える視点を与えた。この結果、「山間部に人口が少ない。」「沿岸部に人口が集中している。」



資料① 授業で用いた資料

という意見が多く出たが、これは人口分布の資料のみから読み取れる内容であり、複数の資料を比較して考察できた生徒は少なかった。一方で、資料中にある中部地方の事例と比較して根拠とした生徒や、既習事項を根拠にした生徒、「新幹線の通っている場所の近くに人口が多い。」と交通網に着目した生徒など、多様なプロセスで根拠をもつ生徒も見られた。このことから、複数の資料を提示し、その根拠を探させる活動は、複数の視点や立場から物事を考えるための有効な手だてであったといえる。また、3つの雨温図から地理的環境を読み取る活動では、それぞれの地点の特徴とその根拠となる予想をあわせて発言できる生徒が見られた。

資料②は、生徒Aの振り返りである。人口分布の情報を読み取った上で、林業が盛んな理由を降水量と関連づけて説明できていた。ただし、この根拠は教科書の記述に基づくものであったため、第2時以降では、資料などから自ら読み取り思考する力を育てていきたいと考えた。

資料② 生徒Aの振り返り

(3)大都市の形成と都市産業

第2時では、都市部の産業について学習した。平野が少ない中での経済発展の工夫を、居住可能地域の少なさと地価に着目させることで捉えられるようにした。都市部と農村部の地価を比較し、「地価が高い=その土地の需要が高い」という思考につなげ、少ない土地に多くの人口が集まることで過密や住宅不足などの問題が生じ、その結果として都市部の地価が高くなっていることに気づけるよう授業を展開した。地価の資料を提示すると「土地の価値が違う。」「電車が通っているなど便利かどうか。」といった意見が出たため、「なぜ便利だと土地の値段が高くなるのか。」という発問とともに、二つの市町の人口の資料もあわせて提示した。生徒はこれらに関連づけ、地価の資料が都市部への人口集中とそれに伴う過密問題の理解につながる様子が授業記録から見て取れた。生徒Aの振り返りにも、地価と人口の資料を結びつけた多面的な記述が見られ、この手だてが有効であったことがうかがえる。

(4)ニュータウンの建設と都市の開発

第3時では、郊外のニュータウンの課題を切り口に、人口の過密問題への取り組みを学習した。過去に人口が増加した際、市や国がどのような政策を行ったかについて、教科書や提示資料をもとにグループで調べる活動を行った。ニュータウンが作られた目的がわからず、つまづいている生徒には資料の見るべき視点を示したり、他の班員の意見を確認させたりした。この活動を通して、ニュータウンの建設のほかに、山を切り崩したり埋め立てを行ったりして宅地を確保してきたことに気づく生徒が見られた。人口増加への対策に意欲的に取り組み、資料の背景にある情報まで読み取ろうとする姿勢がうかがえたことから、この時間の手だては、過去の取り組みを地理的な視点から捉える力を養う上で有効であったと考える。

(5)京都市の未来について考えよう

第4時では、単元を中心となる「住みやすい京都を続けていくためには」という課題に向けて、京都市の人口減少数が2年連続で全国第1位であったことを取り上げた。そこでは「京都市は学生が多いこと」「京都府にある寺社の6割が京都市に集中していること」「京都市の転入・転出者数の資料」「ホテル建設の増加」などの資料を提示し、人口が減少した原因を主に考えさせた。授業前半、資料提示前の段階でも、既習内容に基づき自分なりの根拠を示す発言が見られ、これまでの学習で培った資料活用の力が生かされていることがうかがえた。生徒からは「コロナ禍の影響」「子育て世代の転出」「オンライン授業の影響で京都市に住む学生が減ったため」など、資料を根拠にした多様な意見が挙げられた。ワークシートの記述からも、複数の資料の情報をつなぎ合わせて自分なりの考えをもち、資料とは異なる視点から新たな疑問をもつことができていく様子が見取れた。

(6)京都市存続の危機!?

第 5 時では、これまでの学習を生かし、「魅力のある京都市を続けていくためにはどうしたらいいか。」という発問を中心に授業を行った。生徒が最初にもった意見は、「埋め立てを行う。」「マンションを建てる。」「山を切り崩す。」など、これまでに学習した土地活用を用いて人口減少の問題を解決しようとするものが多かった。意見を交流させる中で、人口増加を優先すべきと考える立場と、寺社仏閣などの景観こそが京都の魅力であり、人口増加を図ればその魅力が失われると考える立場に分かれた。人口増加を重視するグループには「マンションやビルが立ち並ぶ京都に修学旅行で行きたいか。京都ならではの魅力はあるか。」と、景観を重視するグループには「このまま人口減少が続けば、歴史的建造物はどのように維持していくのか。観光業を担う人手は足りるのか。」と、それぞれ揺さぶりをかけた。これにより、生徒は景観保全と人口減少対策という複数の立場から物事を考えるようになった。その後、京都市の景観条例の内容(高いビルや景観を損なう色彩の建物を建てられないこと)を提示し、人口減少が続く中で景観条例をどう捉えるべきかを考えさせたところ、それまでマンションや高層ビル、ニュータウンの建設を主張していた生徒の多くがその政策を見直さざるを得なくなった。その結果、歴史的建造物の扱いについても「ある程度大切にすべきもの」から一歩進み、その保存の程度や在り方そのものを問い直す意見も出るようになった。

4 成果・反省(今後の課題)

(1)仮説①について

仮説①は、資料を複数提示することで、事象を多面的・多角的に捉えられるようにするというものであった。この手だては継続的に行うことで効果が表れると考えていたが、実際に授業を重ねるごとに、多面的・多角的に物事を考えられる生徒や、より多くの立場・視点から考えられる生徒が増えていった。景観条例の是非を問う場面での生徒 A の発言にも、反対の立場を踏まえた上で自分の考えを述べる姿が見られ、複数の立場に立って考えることのできる生徒が増えたことがうかがえる。グループでの話し合いにおいても、第 2 時までは意見が偏ったり、表面的な理由で満足してしまったりする班が多かったが、授業を重ねるにつれて「別の視点はないか。」「反対意見ではどう考えるだろうか。」と、あえて自分と異なる立場から検討しようとする生徒が増え、話し合いがより深まっていった。「過密による問題点は何か。」という一つの発問に対しても、「土地の値段が高くなる。」「場所によってはヒートアイランド現象が起こる。」「住宅不足やごみ問題が考えられる。」など、さまざまな角度からの意見が出されるようになった。以上のことから、仮説①は多面的・多角的に物事を考える力を養う手だてとして有効であったと考える。

(2)仮説②について

第 1 時では、人口分布の資料を検討した際に「新幹線が通っているところは栄えているから人口が多い。」と根拠を添えて答えられた生徒が複数見られた。また、別の授業では「学生や子育て世代の人口流出が大きいから、子育て支援を行うべきである。」と、根拠とともに意見を述べられた生徒もあり、この手だてには一定の効果があったといえる。一方で、口頭では根拠を示せても、それを文章としての的確に記述できない生徒や、教師が問い返すことで初めて根拠を言語化できる生徒も見られた。また、第 5 時の振り返りの中には、資料に基づく根拠のない、実現の難しい解決策を挙げる生徒も一定数見られた。資料をもとに自分の考えや問題の現状を把握することはある程度できていたが、根拠を伴った意見をもてる力を十分に養うまでには至らなかった。このことから、仮説②については、成果が見られた面もあるが、全体としては改善の余地が残る結果となった。今後は、根拠とともに発言することを繰り返し経験させるとともに、それを習慣化するための発言や思考のフォーマットを整えていく必要があると感じている。

資料⑮は、単元末における生徒 A の振り返りである。仮説②についてはある程度の効果が見られたと推測される一方、仮説①に関する明確な変容はこの記述からは十分に見取れなかった。総じて、仮説①では複数の資料をもとに考える力を伸ばすことができたが、仮説②で目ざした根拠に基づく意見形成の力については、今後さらに複数の資料や複雑な資料を読み取る力、多面的・多角的に物事を見る力とあわせて、根拠を明示する習慣を育てていく必要がある。



資料③単元末における生徒 A の振り返り

5 終わりに

今回の実践を通して、単元全体を通して生徒をどのように育てていきたいかというイメージが、自分の中で十分に定まっていなかったことが明らかになった。育てたい生徒の姿が明確でなければ、単元構想や授業ごとの手だても最適なものを選ぶことができず、生徒が教師の願う姿に育つことは期待できない。まず、自分が生徒にどのような姿になってほしいかという願いを明確にし、その実現に向けた計画と手だてを具体化していくことが必要である。

また、自身の実践の具体性や授業構成の明確さにも課題が残った。目標に至るプロセスが十分に定まっていなかったため、さまざまな方向の手だてや支援を行うこととなり、授業スタイルや育てたい生徒の力に一貫性を欠く結果となった面がある。今後は、大きな目的を定めた上で、そこに向けたスモールステップを踏む形で単元・授業を構想し、今回得られた成果と課題を次の実践に生かしていきたい。

【参考文献一覧】

矢ヶ崎典隆, 坂上康俊ほか「新しい社会 地理」東京書籍株式会社 2021 年発行

「【京都の厳しい景観条例】面白い景観デザインもご紹介!!!」

<https://royal-juken.jp/blog/3227/> (2023/10/10)

京都市から若者と子育て世代が離れていく理由 インバウンド誘致に奔走も市民の流出止まらず

<https://toyokeizai.net/articles/-/678117> (2023/10/10)